

今回もやります

令和2年8月17日

六稜カルチャー講座「世界名作文学と旅」を受講して下さっている皆様へ

講師 83期 久井 勲(事務局とご相談済)

hisai.odic@coffee.ocn.ne.jp

拝啓 残暑にくわえ外出自粛お見舞い申し上げます

コロナウィルス感染の報に気をもむ日々ながら、皆さまにおかれては元気にお過ごしのことと拝察いたします。前回6月の六稜講座で初のパソコン(ライブ)中継方式を試み、多数の方にスイッチオンをしていただきまことにありがとうございました。一部の裏方役の友人らのご協力もありがたかったです。思えば前は第1波の終息に安堵をついた時期でしたが、さすがに今回は第2波の狂奔いまだ緩まざる時期、そこで六稜同窓会事務局と相談し、本講座を、

8月28日(金)午後2時~4時、いつもどおり演(や)る ただしパソコン経由の録画方式です。さすがに今回は私も、岡山/兵庫の県境が越えられず、墓参のあと岡山県立図書館のビデオ室で録画しました。♪メをここにお送りいたします。

今回は
ご放念
下さい

パソコンボタンの押し方は前回と同じく次のとおり。(当日午後2時から)

- ・六稜webから入って、
- ・「六稜人の活動」の中の六稜カルチャー講座の画面を出し、
- ・その画面の中の「六稜カルチャー講座」チャンネルをクリックする。

敬具

【♪メのことで】

- ①「帰らぬ人」(ハデイ)は、高校3年の葛西憲徳先生(ちょっと怖かった)の英語のサトリダー授業で取り上げられたと記憶しています。当時は「妻ゆえに」のタイトルでした。冒頭の情景描写を、先生が独特の口調(音節をよく分離して、例 treated を トゥリーテッドと)が語っておられたのが思い出されます。
- ②「異邦人」(カミ)は前回の「ペスト」の流れです。思うに、自分で自分が「異邦人」に思えることがあります。特に直射日光に照らされたときなどです。
- ③「ほら吹き男爵の冒険」(独ビュルガー)はアホ話ばかり、いままでテレビ等で映画化されていますが、日本でこれに相当する話としては、笑福亭仁鶴の「うそつき村」のようなものです。「-----“キューシャ可愛や別れの辛さ” ちゅうのは、こっから来てまんねんでエ」というようなアホ話、ワハッです。
- ④「犬を連れた奥さん」 チェホフには珍しい不倫もの。最後は無事収まります。
- ⑤「デミアン」はハッ得意の学園もの。誰にも不思議な転校生はいるのでは?
- ⑥「森は生きている」(マルヤク)は、以前はよくミュージカルにされていました。私は勝手ながらに想像するのですが、ロシア人の国民的美少女が、「復活」(トルストイ)のキューシャならば、それをもう少し幼少化すると、この娘になるのかな、と。
- ⑦別添の「ラブレター名台詞番付」は、裏面の寸評をご参照下さい。以前これを他所で一丁前に“文学論”的にしゃべっていて結構受けました。 ♪